

「内視鏡的膵・胆管造影法の実際」

国立がんセンター部長・血清部・内科

石 井 兼 央

内視鏡によって十二指腸、特に十二指腸乳頭を直接観察することは、消化器内視鏡に携わる人々のみならず、消化器病に関心ある臨床家の長年の一大関心事であった。事実十数年来その可能性が内外の学者によって追求されてきた。胃カメラに始まる消化器内視鏡の先進国であり、器械開発のすぐれた技術とつみ重ねられてきた内視鏡検査の豊富な経験をもつわが国で十二指腸ファイバースコープによる十二指腸内視鏡と内視鏡的膵管・胆管造影法が開発され、ほぼ完成の域に達し、この検査法が急速に普及しつつあることは、けだし当然といってよいだろうが、この技術の開発と完成にはひたむきな情熱と執念がなければできなかったであろう。

この書の著者大井至氏は、高木国夫氏とともに十二指腸ファイバースコープを用いる内視鏡検査、内視鏡的膵管・胆管造影法の開拓者でありこの検査法を完成させた1人であることはよく知られている。

したがって本書では著者の苦心さ

れた貴重な経験をもとに本検査法についてのすべてが網羅されている。内視鏡的膵管・胆管造影法の歴史に始まり、検査の手技、読影上の問題点、適応と禁忌などの項目について実に具体的に要にして簡に述べられている。たとえば検査法についてみるとファイバースコープの挿入法、十二指腸乳頭のみつけ方、膵管・胆管への挿入の仕方、造影のやり方などきわめて具体的に述べられており初心者でも容易に理解できるようにわかりやすく、この検査法を試みようとする臨床家には必読の指導書であろう。

この検査法による膵管・胆管造影像の読影は著者も述べておられるようにすべて明快にわかっているとはいいがたく、今後の検討が必要であろうが、本書では著者の豊富な経験例のなかから典型的な症例の鮮明な造影像が例示されていることもこの著者ならではの本書の特色であり、読者の大きな参考になるであろう。

本検査法、特に膵管造影による副作用として膵障害が心配されるが、

この点ではまだ十分に解明されていない。主膵管の造影のみでは問題が少いように思われるが、膵房造影でははたしてどうであろうかと疑問が残っているように思われる。著者は豊富な経験から副作用は少ないとされているが、この点については、「今後の検討がさらに必要であり、本検査はあくまで慎重に、十分に検査の適応を考えて行うべきである。急性の合併症では禁忌である」と述べておられる。

この検査が臨床的に応用されるようになってから日がまだ浅く、読影、副作用などに問題は残されているが、従来診断が困難であった膵胆疾患にはきわめて有力な検査法であることは疑う余地はなく、本検査法を開拓し、完成させた本書は指導書としてまた解説書として時宜を得たものであり、広く消化器病学に携わる臨床家にとって必読の書であろう。

B5・頁230・図40・写真228

¥ 7,000 ㊦ 200

医学書院刊